深田久弥●山の文学全集

ヒマラヤの高峰

80ア

監修

小林秀雄
井上靖
三田幸夫
今西錦司

深田久弥●山の文学全集 IX

ヒマラヤの高峰（下）

朝日新聞社

深田久彌・山の文学全集 IX
ヒマラヤの高峰（下）
全十二巻・第十一回配本

発行　昭和五十年一月二十日
著者　深田久彌
著作権者　深田志げ子
装幀　原弘
発行者　岡見璋
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋
© Shigeko Fukada 1975
0395-240169-3000

深田久弥・山の文学全集　Ⅸ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

ヒマラヤの高峰（下）……七
ランタン・リルン……九
カルタプー……三
スパンティク……三
ナンダ・コット……三〇
アンナプルナⅢ……三五
キャシードラル……三三
キンヤン・チシュ……四一
レオ・パルギアル……四四
チャマール……五六
バルンツェ……六四
チョモ・レンゾ……七三
ポベーダ……七九

カン・グルー　九九
プタ・ヒウンチュリ　一〇七
ウルゲンド　一二五
カンピレ・ディオール　一三一
カンチェンジャウ　一三九
ディラン　一四七
ヌンブール　一五〇
ニルギリ　一五八
K　6　一六六
カ・カルポ・ラジ　一七三
モムヒル・サール　一八一
コー・イ・ランガール　一八九
カンテガとタムセルク　一九六
セント・ジョージ峰　二〇一
ビッグ・ホワイト・ピーク　二〇九
デマヴェンド　二二五
トルコの山　二三三
ミール・サミール　二四〇

ナムチャ・バルワ　二五六
タルン・ピーク　二六四
シャハーン・ドク　二七二
ティリチ東峰および北峰　二八〇
崑　崙　二八九
ガンガブルナ　二九七
ヒムルン・ヒマール　三〇五
ナラカンカール　三一三
コー・イ・バンダコール　三一三
コー・イ・モンディ　三三八
スワート・コイスタン　三四六
ノシャック　三六二
ギャチュン・カン　三八五
ローツェ・シャール　三九四
ゴジュンバ・カン　四〇二
ダウラギリⅡ　四一一
コヨ・ゾム　四一九
ハヌマン・ティバ　四二六

アララット　四三四
コー・イ・ウパリシナ　四四二
ムリットニイ　四五〇
カール・マルクス峰　四五八
ランタンⅡ　四六六

後記1・2・3・4・5　四七五

深田久彌・人と作品（九）　近藤　信行……四八五
解　題　中馬　敏隆……四九二

ヒマラヤの高峰（下）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ランタン・リルン

Langtang Lirung (7245m)

昨年（一九六二年）のブレ・モンスーンに、アメリカの元大統領ウィルソンの孫の引率する登山隊が、ギャチュン・カン（七八九七メートル）へ向かったまま行衛を絶ったという噂が伝わった。その後何の消息も聞かなかったが、『ライフ』最近号（三十四巻五号）に真相が発表されて、私たちをひどく驚かせた。

ギャチュン・カンは一九五九年福岡大学の偵察隊がガウリサンカールの帰り立ち寄って見てきた山であり、そのうち本隊を出そうと計画中の山である。また一方長野県山岳連盟でも、古原和美君を隊長として同峰へ登山隊を出す準備が進んでいる。東京都山岳連盟でも同様の計画があり、すでにネパール政府から登山許可を得たとも聞く。ギャチュン・カンは福岡大学隊の撮ってきた写真を見ても、実に堂々とした屋根形の立派な山であり、しかも八〇〇〇メートルに近い処女峰とあれば、ヒマラヤ宗徒の眼がそこへ集まるのも当然だろう。右の諸隊はいずれも昨年アメリカへ問合わせの手紙を出した。何の返答もなかった。

なかったはずである。ウィルソン隊はギャチュン・カンへ登るように見せかけて、実は他に目的があった。彼等は同峰南方のヌプ・ラを越えてチベットに入り、北側からのエヴェレスト登山を企てたのであった。

ヌプ・ラ（五九一三メートル）はマハランゲール・ヒマール（エヴェレスト山群）の国境稜線上にある鞍部で、チベット側の西ロンブク氷河の源頭と、ネパール側のゴジュンバ氷河の源頭を結ぶもので、北側からは一九二四年にハザードとハリ・シン・タパが、南側からは一九五二年にヒラリーとロウが、その上に達しているが、まだそれを越えたものはなかった。

南側からヌプ・ラへの登りには、相当困難なアイス・フォールがある。ウィルソン隊はリエゾン・オフィサーとシェルパをネパール側へ残して、彼等四人だけでその鞍部からチベットへ潜入した。エヴェレストの北面を廻ってノース・コルに登り、そこから頂上へ向かって北東稜を七六二〇メートルの地点まで達した。しかもヌプ・ラ以後はわずか四人の隊員だけで荷を運び、ポーターも

連れず、酸素も使わず、この高度に達したことは、おどろくべき頑張りである。

この小パーティの記録が、今年のアメリカの大がかりなエヴェレスト隊の報告と、期を同じくして公表されたのは、はなはだ対照的である。今年のアメリカ隊は、隊員十九名、シェルパ三十六名、ポーター七百五十名、荷物一八トン、費用一億一千七百万円という前古未曽有の大部隊である。ウィルソン隊は総費用三百六十万円というから、三十分の一に過ぎない。

もちろん遠征隊の任務や使命は違うから比較にはならないが、エヴェレストへ登るという最終目的は同じだろう。ウィルソン隊の記事のサブ・タイトルに "Breaking all the Rules" とある。たしかに彼等のやりかたは正統的ではない。しかし多くのアドヴェンチュアは正統に捕われないところにある。アドヴェンチュア精神に欠けた登山や探検は、優等生の行状のように私には面白くない。

それにしても今年のアメリカ隊は物量作戦の功をあげた。正統のルートの登頂だけで満足せず、未踏の西尾根から頂上へ登り、南東尾根へ降ったという。ヒマラヤで登路と降路を別にしたのは、これが最初だろう。しかも最高峰のエヴェレストである。

エヴェレストもこうたびたび登られると、新鮮味が薄くなった。今さら大騒ぎをして登山するほどのことでもないという感じがしてくる。来年はドイツ隊、再来年はインド隊、その次の年は日本隊の予定になっているが、登って当たり前、登れなければ意気地がない、といった印象を一般に与えるようになるだろう。シプトンの説くように軽エクスペディションで行くか、ハントの言うように酸素なしで企てるか、何か登山に一生面を加えなければ、一般の注視を集めることは困難になるだろう。

今年のアメリカ隊も一人の犠牲者を出した。隊員ジョン・ブライテンバッハがクンブ氷河で、崩壊してきた雪氷の下になって命を落としたと伝えられる。どこの国のヒマラヤ遠征隊もその出発に際して「登頂しなくてもいいから無事に帰ってくるのが第一だ」とされている。おそらく隊員はあまり本気には聞いていないだろう。安全第一はアドヴェンチュアではないからだ。アドヴェンチュアが遭難を生むとは限らないが、すれすれのところは通る。安全第一という点で日本のヒマラヤ登山隊は世界の模範である。これだけ数多くの遠征隊を出しながら、隊員の犠牲がこれほど少ない例は、他に見ない。そのた

った一つの事件が、大阪市立大学隊のランタン・リルンでおこった。

＊

一九六一年、大阪市立大学の登山隊がキャンジン・ガンに到着し、リルン氷河の最末端にベース・キャンプをおいたのは四月八日であった。森本嘉一隊長、広谷光一郎副隊長、隊員四名、シェルパ四名、ハイ・ポーター五名、ほかにリエゾン・オフィサーとポスト・ランナー二名がベースに入った。

ランタン・リルン登攀を隊長は二期に分けた。第一期は四月十三日から始まった。それまでに四日かかってルート偵察の結果、リルン氷河を直登することになった。第一キャンプ（四二五〇メートル）は氷河の取付き点、第二キャンプ（五〇七〇メートル）は氷河の途中にあるインゼル（島）の直下、そこからインゼルの右を通って上部台地に出て、その雪原の入口に近く第三キャンプ（五六〇〇メートル）を設けた。

リルン氷河は急峻な上に激しい変化をするので、大小無数のセラック地帯を通り抜けるために、固定ザイルや縄バシゴを多数使用して、ルート工作には並々ならぬ苦労があった。第三キャンプ建設をもって第一期計画を終わる予定であったが、さらに登路を偵察しておく方が有利とみて、二十一日広谷副隊長とパ・ノルブは第三から雪原を横断して、大斜面に取りつき、国境稜線上へ出た。

この稜線はランタン・リルンからキムシュン（六七四五メートル）へ続く長い尾根である。私たちは名前を知らなかったから、そのキムシュンを三本槍と呼んだ。飯田隊はチョムギャムツと呼び、アウフシュナイターはツァンブ・リと呼んでいる。広谷隊員が稜線へ出たのはそれの最低鞍部よりもリルン寄りの方であった。しかしそれでも稜線上の岩峰が進路を妨げているので、さらに上部の稜線へ出る道を開いた。

それで登頂の見通しはついた。第一期の目的が果たされたので、全員ベース・キャンプに下って、二、三日の休養を取ることになった。ところがそれから思わぬ悪い天候が続き、二週間も動けなかった。ようやく第二期登攀にかかったのは五月八日であった。

その日は快晴で、ほとんど隊員、シェルパ全員で、形のすっかり変わった氷河を登り、第二に到着。翌九日は天気が思わしくないため停滞、そして翌十日第三キャンプへ入った。

第三の位置を少し移動して大雪原の最南端においた。

そこに三つのテントを張り、その一つに森本、広谷、大島、もう一つに藤本、近藤、伴、五人用のカマボコテントには、ギャルツェン・ノルブ以下五人のシェルパが眠った。その夜は静かだった。風一つなく満天の星空だった。

椿事は翌朝の四時四十五分に来た。まず爆風、その強烈なショックとともに、全員雪崩に流された。

日本で最初のヒマラヤの遭難であった。その詳細を第三人者の私がよそよそしく語るのをやめよう。広谷副隊長が詳しい報告を書いておられる(『山岳』第五十七年)。

森本隊長、大島隊員はテントぐるみ行衛不明、ギャルツェン・ノルブは頭部を雪中に埋没して絶命。他の隊員、シェルパもそれぞれ怪我をした。

悲報が日本に伝わったのは、五月十八日の夕方だった。翌日の各新聞は社会面の大半をその報道に割いて、その悲壮な死を悼んだ。

カルタプー　Kharthaphu　7221m

この春(一九六三年)日本から出た三つのヒマラヤ隊のうち、電電九州隊がまず帰ってきた。目あてのヒムルン・ヒマールの頂には立てなかったが、いろいろ貴重な体験やデータを得たであろう。登頂出来ないとすぐ失敗という言葉が使われるが、それはあまりに登山を勝負的に視るからで、たとえ頂上に達しなくとも、その収穫や行動の点で成功と思われる隊が、今までにも幾つもあった。

千葉大学隊はヌンブールに初登頂した。世界でまだ誰も試みなかった未知の山だけに、その功績は大きい。私たちは初めてこの山のハッキリした姿に接し、その山容について知った。登頂者松尾宏君からの詳しい私信によれば、イギリス王室地学協会の十万分の一のエヴェレスト地域図は間違っていて、役に立たなかったという。全く記録も地図もない山に、ルートを探し、予期しない障碍を乗り越えて、最終目標に到着したとは、今後の日

本のヒマラヤ隊へ大きな勇気づけとなるだろう。これまでの多くの隊は何か手がかりのある山しか選ばなかったが、ヌンブールは全く白紙の山と言っていいからである。

トゥインズをねらった東京農業大学隊の消息も、近くわかるだろう。カンチェンジュンガの裏側のベースから手紙を貰ったまま、その後音沙汰がない。その便りによれば、六人の隊員はしごく元気だし、五名のシェルパも全部ヒマラヤに歴々たる経験の持主ばかりだから、何か大きな獲物なしには戻って来ないだろう。

以上のほかに、東海大学隊の三名が西ネパールのカルナリ河上流へ探査に出かけており、日本鱗翅学会の蝶蛾調査隊が東ネパールへ入っている。川喜田二郎さんも民族調査のため、ネパールへ出かけた。

外国の隊では、エヴェレストに画期的な登頂を果たしたアメリカ隊が大きく注目されよう。これから報じられてくるその詳細が楽しみである。

ダウラギリ二峰と三峰をねらったオーストリア隊は、登頂は成らなかったが、第二峰への新ルートを発見したと伝えられる。ダウラギリ二峰と言うと主峰の付属物のように思われがちだが、さにあらず、主峰と離れて独立の姿勢を持った見事な山である。主峰が登頂された今日、この嶮峻な第二峰が今後各国の登山隊の大きな目標となるだろう。

一人の英人が二人のシェルパとともに、ランタン第二峰に登頂したという報告が外国電報にあった。ランタン第二峰とは初耳だが、おそらくアウフシュナイターの地図のガン・チェンポのことだろうと思われる。標高もほとんど同じだし、第二峰という呼び方も納得出来る。と言うのは、前章にも書いたように、ランタンの谷で最も立派に見えるのは、最高峰のランタン・リルンについでは、この山であるからである。

ヒラリーを隊長とする東ネパール登山隊は、タウチェとカンテガを目あてにしていたが、そのカンテガに登頂した。両峰とも七〇〇〇メートルに足りないが、写真で見ても非常に嶮しい美しい山である。ヒマラヤでも、高さを問わず難峰をねらう時代が来つつあるのではなかろうか。ほとんど絶望的に見られていたアマ・ダブラムが昨年三月十三日の早期に、やはりヒラリーの隊によって登頂された。その自信をもって、彼はこの界隈の難峰を一つずつ片付ける意欲に燃えているのではないかとさえ察しられる。

一九五三年のエヴェレスト隊の一人は書いている、

「チャンボチェの芝生に寝ころんで、まわりを取り巻く激しく鋭い、美しい峰々を眺めていると、もうそれに登ろうという気は無くなる」と。それくらい人を寄せつけないふうに見える峻しい峰である。今までに登頂された多くの山は、部分的に困難なところはあっても、忍耐努力が最大の武器であった。ところが岩と氷とから成った難峰は、それよりむしろ高度の登攀技術が要求される。謂わばクライマー向きの山である。

やはりこの春スコットランド隊がカラコルムのパイユ峰へ向かったと報じられているが、カラコルムには七〇〇〇メートル以上の未踏峰が数多くあるにもかかわらず、あえて六六六〇メートルの美しい針峰を選んだのも、同じ傾向の現れと見ていいかもしれない。

チャンボチェの近傍には、まだそういう難峰が幾つも残っている。カンテガの西にあるタムセルクなども実に美しい、しかし峻しい峰である（『ラ・モンターニュ』邦訳『山岳』第一巻、二五ページ参照）。勇敢なクライマーたちはおそらく長くそれを放っておかないだろう。

それにしてもエヴェレスト山群に対するヒラリーの執着心は異常である。一昨年の秋から昨年の春にかけて越冬した時には、ナムチェ・バザールのシェルパの子供たちのために学校を建ててやっている。そして今年の春にはさらに二つの学校を建て、優秀な教師を送るプランを持っていた。学校の名は Expedition Schoolhouse となっている。

しかし日本ほど数多くの隊をヒマラヤに出している国はないだろう。先にあげた隊に引き続き、この秋の登山を目ざして、東京大学隊がバルトロ・カンリへ、同志社大学隊がサイパルへ、すでに出発した。続いて、北海道大学がナルカンカールへ、東京都立大学と大阪府立大学の合同隊がシャルブーへ出かけることにきまった。

変わった隊では、北海道大学山岳部の学生三名が、ヒンズークシへ向かって、先日（六月末）和歌山県の下津港からタンカーで発って行った。隊長格の鶴巻大陸君は九山山房の常連だが、大きな夢を持った楽しい人物である。三人で五十万円くらいしか持って行かなかったが（タンカーでクウェートまで直行五千円だそうである）、イランから徒歩でアフガニスタンまで行こうというのだから、志は遠大である。

組織的な登山隊も結構だが、こういうプライベートな探検旅行を試みる青年がふえてきたことは、わが国のヒマラヤ遠征の大きなプラスであろう。そういう前例とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com